

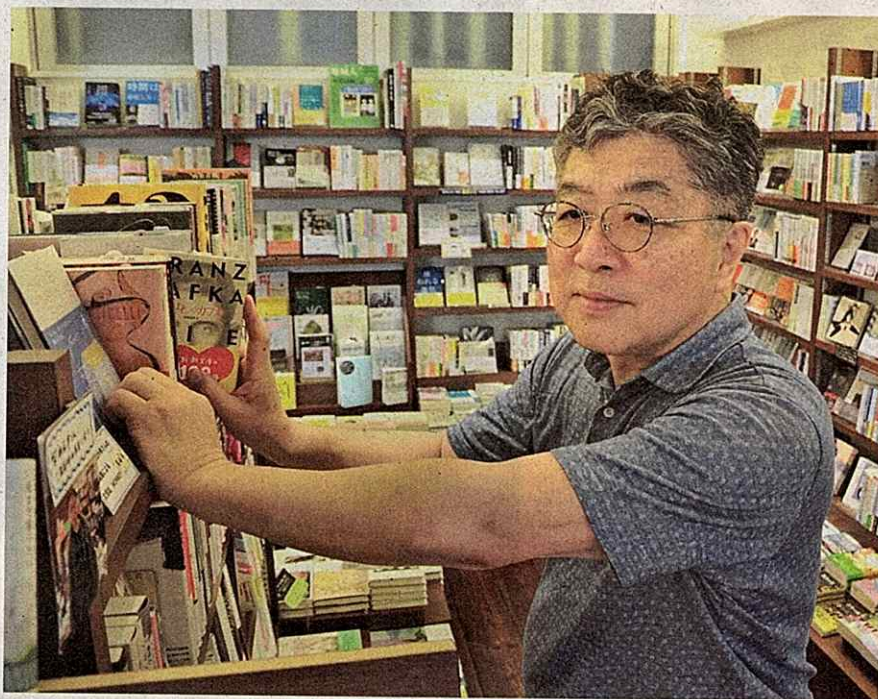
ブックスキューブリック店主 大井 実さん 64



紙の本を守る「インフラ」

インターネットの普及などによる活字離れで、書店が一つもない全国の「無書店自治体」が4分の1を超えている(出版文化産業振興財団調べ)。そんな中、大型書店とは一線を画す「独立系書店」の先駆けとして福岡市で四半世紀、営業しているのが、「小さな総合書店」を標榜する「ブックスキューブリック」だ。店主の大井実さん(64)に、これからの書店のあり方について聞いた。

(今泉遼)



福岡に書店を開いた経緯は。

「幼い頃から本が好きだった。高校時代、勉強は全くせず、部活動のラグビーと読書に熱中した。『良い大学に進み、良い会社に就職する』という周囲の雰囲気は鬱屈していたが、救ってくれたのが本だった。カフカの『変身』やカミュの『異邦人』など色々と読みあさった」

「大阪で仕事をしていた30

おおい・みのる 福岡市出身。県立福岡高、同志社大を経て、東京、イタリア、大阪でファッションや現代美術のイベントの企画などに携わった。2001年、福岡市・けやき通りに書店「ブックスキューブリック」を開業。08年にはカフェとギャラリーを併設する箱崎店をオープンし、作家のトークショーを精力的に開く。06年からは、「福岡を本の街に」を合言葉に多彩な本に関するイベント「ブックオカ」を毎秋開催している。

歳代後半に本屋を始めることを決意した。当時は福岡市・天神に大型書店が乱立していた頃で、多くの人から『やめといた方がいい』と言われた。店名は、こだわりながらも商業的にも成功した映画監督のスタンリー・キューブリックにあやかりたくて名付けた」

「書店としてのこだわりは何か。『自ら選んだ本を置いていく。漫画は巻数が多く、売り場面積が必要なのと万引き対策として置いていない。お客さんとスタッフのため、足が疲れにくいように床は木製にし、温かい雰囲気にするため、蛍光灯ではなく白熱灯を使っている。『小さな総合書店』を自負しており、玄人向けのマイナーな作品というよりは、一般的なベストセラーを置き、使い勝手の良い書店でいることを心がけている」

「本の魅力とは。

「スマホなどでSNSを見ていたらすぐに時間がたつが、後から考えたら何も記憶に残っていない人が多いのではないか。次から次に情報が消費される時代。紙の本はディスプレイ上の情報とは違い、記憶に残るし、心に感動という栄養を注いでくれる。傍らに置いておくことで長い人生で悩んだ時の精神安定剤にもなる」

政府は6月に「書店活性化プラン」を公表した。書店の減少をどう考えるか。

「開店当初から『本の売れ行きは落ち込む』と思ってはいたが、予想以上だった。インターネットの時代で、本を読まない人が増えたのが根本

「紙の本を守るのが書店であり、『文化的なインフラ』としての役目があると思っている。書店は減っているのに、その重要性は増えている。経営は決して楽ではないが、再び本が脚光を浴びる時が来ると信じて続けたい」